

スミスにおける市場と歴史 ——マルクスのスミス批判——

小幡道昭

はじめに

社会主義体制における急激な変化を一つの契機として、マルクス経済学の内部においても、市場が社会的な再生産の構造に対して与えてきたさまざまな影響を、長期の歴史的展望のもとに再考してゆこうとする動きが高まりつつある。既存の社会主義体制が程度の差こそあれ市場に対してとってきた総じて否定的な態度は、もとを質せばいいたいかなる理論に由来するものであったのか、そしてさらに遡れば歴史的な発展段階を扱ったいわゆる唯物史観のなかで市場なるものはどのように位置づけられてきたのか、こうした基本問題を考えようとするとき、マルクスがスミスに対して示した批判的態度を吟味しなおすことは、一つの重要な手掛かりを与えてくれるようと思われる。

マルクスがリカードによるスミス価値論の批判を高く評価し、その徹底化のうえに人間労働の二重性の理論を展開し労働力商品の価値規定を確立することで、資本主義経済に固有の搾取関係の必然性を価値法則の貫徹の結果として理論的に暴露しようとしたことはよく知られている。¹⁾ このような価値論の領域における搾取理論の確立は、さらに進んで蓄積論の次元におけるスミス批判に発展する。社会的分業の発展に基づき生産力の上昇が、市場経済の構成員全般に配分の絶対増という利益をもたらす可能性を強調するスミスの発展的調和に対して、

それは搾取の強化を通じてプロレタリアートの絶対的な窮乏化を生むのだというマルクスの認識が対置されていったのである。

しかし、『資本論』のうちには第1巻の起承転結のうちにはっきりと刻み込まれたこうした搾取・窮乏化的批判に平行して、「古典派経済学の根本欠陥の一つは、商品の、また特に商品価値の分析から、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけだすことに成功しなかったということである」²⁾と捉え、資本主義経済が歴史性を帯びた一社会であることに対する認識の欠如を指摘する形態的・歴史的なスミス批判の流れが脈打っていた。そこには、ある財が労働を通じて生産されることと、その財が商品という形態を纏うこととの間には、根本的な断絶が横たわっているのだというマルクスの基本的な認識が蔵されている。このような市場把握は、「商品交換は、共同体の果てるところで共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる」³⁾という歴史的理解に裏打され、市場が社会的再生産に対してもつ外的な性格を、理論的に摘出する方向へと発展してゆく。ここに価値形態の分析を起点に、商品・貨幣・資本の横の連鎖を確定し、あらゆる社会に共通な労働過程を挟むことにより市場と社会的再生産との縦の結合を絶つという理論構成が必然となるのである。それゆえ、先のような古典派経済学における没歴史性に対する批判は、「社会的分業は商品生産の存在条件である。といっても、商品生産が逆に社会的分業の存在条件であるのでは

1) たとえば、スミス価値論を批判した『資本論』第2版で付加えられた次の註をみられたい。K. Marx, *Das Kapital*, I, *Marx-Engels Werke*, Bd. 23, 1962, S. 61, 岡崎次郎訳『資本論』, 国民文庫(1), 1972年, 91-92頁。

2) *Ibid.*, S. 95, 同訳(1), 149-150頁。

3) *Ibid.*, S. 102, 同訳(1), 161頁。

ない⁴⁾ というかたちで、いわゆる交換性向と社会的分業とを表裏一体のものとするスミスの立場に対する批判となって発現することになるのであった。

われわれがスミスの歴史理論の検討を通じてこの論文で吟味してゆきたいと考えているのは、このような市場の外的性格に関する命題であり、それと唯物史観との関連である。以下では、まずマルクスが主たる批判の射程に据えたかぎりでのスミスの市場認識を整理しておくことにする。これによって、マルクスの批判が当時のスミス経済学の支配的な理解にいかに鋭く対立するものであったかが示されると同時に、それがまた反面において、いかにその時代のスミス受容のあり方に大きく規定されたものであったかという点も明らかになってこよう[1]。ついで、こうした時代的制約の故に、マルクスがスミス批判の外に取り残すことになった諸相に検討を進め、スミスにおける歴史理論の全体像を探ってゆくこととする[2]・[3]。これを通じて、スミスの一面に示された市場に対する歴史的な認識の特質を抽出し、それが今日のマルクス経済学にどのように再度吸収可能なものか、考えてみることにしたい[4]。こうしたなかで、市場と社会的再生産との作用・反作用によって歴史的に自己変容を遂げる経済として資本主義経済の基本原理を捉えてゆこうとするわれわれの理論構成⁵⁾が、大きな転換点に直面している現代社会の理論的把握にとってどこまで有効たり得るか、この点がスミス解釈の背景に多少とも浮上すれば、この小稿の課題は果されたことになる。

1 スミスの理念的市場形成論

マルクスが市場の外的性格を看過するものと

4) *Ibid.*, S. 56-57, 訳(1)84頁。これと同様の見解は、スミス批判を明示したかたちでも述べられている。たとえば K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-2, 1980, S. 137, 武田隆夫ほか訳『経済学批判』, 岩波文庫, 1956年, 68頁。

5) 小幡道昭『価値論の展開』, 東京大学出版会, 1988年。

して鋭く批判したスミスの市場形成論の欠陥は、とりわけ『諸国民の富』の冒頭において展開されている分業と市場とを交換性向によって結合してゆく論理に端的に示されている。スミスは第1篇第1章「分業について」でそれがもたらす生産力のめざましい増進を説いたのち、そこから邁進して第2章「分業をひきおこす原理について」で、次のように論じる。

こんなにも多くの利益を生むこの分業は、それによって生じる社会全般の富裕を予見し意図した人間の知恵の所産ではない。分業というものは、こうした広い範囲にわたる有用性には無頓着な、人間の本性上のある性向、すなわちある物を他の物と取引きし、交易し、交換しようとする性向の、緩慢で漸進的ではあるが、必然的な帰結なのである。⁶⁾

ここに示されている理論構成自体は、ある意味では啓蒙主義に共通する一般的な方法に基づいているように思われる。すなわち、はじめに人間なるものに特定の内属性の性格を埋め込んでおき、これを前提にしてそこからこのような個体の織りなす社会を一種の演繹操作で導きだすというやり方である。こうした構成原理では、出発点となる本性をいかに説得的なかたちで提示できるかが、ある意味で理論全体の成否を左右する鍵を握ることになる。

たとえばホップスの場合であれば、『リバイアサン』の序説で「汝みずからを読み」という格言を引き、人間の本性の解剖分析を徹底した内省に求めるという手法に訴えている。彼は、「何を情念の対象にするか」という問い合わせに対し

6) A. Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Modern Library edition, 1937, p.13, 『国富論』大河内一男監訳、中公文庫, 1978年, I, 24頁。以後、本書からの引用に際しては、WN, p.13, I, 24頁というように略記して出典を示すこととする。なお、この箇所に関してはマルクスも、この分業の起源に関するスミスの巧みな説明を紹介し、さらにこれに連なるその他の古典派経済学者の見解とあわせて論評したことがある。K. Marx, Ökonomisch-philosophisch Manuskripte aus dem Jahre 1844, in *Marx-Engels Werke*, Ergänzungsband erster Teil, 1968, S. 557-561, 『経済学哲学草稿』, 城塚登・田中吉六訳、岩波文庫, 1964年, 169頁以下。

ては千差万別の答をもつような人々の間においても、その情念の発動のしかたを調べてみるとおどろくほど似たものが観察されるではないかと述べ、いわば手段を目的から峻別するのと同型の手続を介し、形式面に現れる類同性を起点にコモンウェルスという人工人間が人間社会に不可避たることを導出するのである。ホップスを特徴づける契約理論を媒介とした自然状態から国家社会への論理上の急旋回も、畢竟その出发点に埋め込まれた特異な人間の本性の所産だったのである。

スミスの場合も、大枠ではこうした論理構成を踏襲しながら、最初の人間の本性ははるかに社交的で急激な変化を厭うという側面を軸に提示される。そしてその提示のしかたもホップスの内向的な深化とは異なり、しばしば動物社会との巧みな対比を織り混ぜながら、魅力的ななかたちで説得的におこなわれてゆく点に最大の特色がある。芸で主人の気を引き物をねだる犬の行為が、もっぱら相手の自愛心に訴えることで触発される人間どうしの交換の特徴を鮮やかに照らしだし、犬の先天的な能力の多様性が、交換と分業に媒介されて後天的に発生する職業的な能力の隔壁と倨傲を映しだす鏡とされるといった具合である。こうして、今まで明確な表現をもたなかった漠たる対象に的確な表現を与える、この存在してはいても見えなかったものに言葉という光を照射する詩的な過程が、同時にまたその対象の側の生成の過程に投影され、読者に強い印象を与えることになる。

このような対比はスミスの場合、さらに当時グラスゴーを中心に北米大陸との貿易が隆盛に向うなかで人々の知的好奇心をかきたてていたインディアン社会に関する伝聞を下敷きとした「初期未開の社会」像⁷⁾と、彼自身の生活の場たる商工業都市をモデルとした「文明社会」像との対比へと引継がれてゆく。こうした対比においては、およそ人間を人間たらしめるその本

性が狭い範囲においてしか実現されていないが故に、ある社会がまだ未開であると判断されることになる。このかぎりにおいては、スミスにおいても啓蒙主義的な傾向は色濃く残っているといってよい。そして、ここにみられる初期未開から文明への転化という図式は、ある種の歴史的な擬制のうちに一般的な社会的進歩の過程と同定されることになる。こうして、文明社会は交換を求める人間の本性が全面的に開花した社会として、理念的な意味あいを帯びることにもなるのである。

スミス自身は、この開花の過程を「緩慢で、漸進的ではあるけれども、必然的」であるという長期的な展望のもとに捉えていた。しかし、商業社会が単に効率性の観点だけからではなく、このように人間性の全面開花という規範的色彩のもとに理念化されることになると、そこにはさまざまな濃淡において社会改革的な動きを刺激し鼓吹する作用が派生する。改革運動を進めようとする人々のなかから、スミス自身の漸進的、自動的な観点は括弧にいれ、理念面を強調してその実現を意識的に遂行すべきだという方向で、スミス経済学を吸収しようとする潮流も簇生することになる。ブルードンに代表される大陸の改良主義がこの傾向にあり、後発資本主義国におけるスミスの受容にもいわゆる近代化論というかたちで、この傾向は絶えずその蔭を落してきたのである。

マルクスたち新世代の社会主義者にとっていかんとも受け入れ難かったのは、この種の旧態然たる啓蒙主義の母斑をとどめた社会主義であった。このような近代政治思想の潮流がその論理構成の背面に担ってきたある種の革命主義はフランス革命のなかすでに分解し、その限界の乗り越えが求められる新たな局面に時代は突入しようとしていた。こうした旧式の論法は、その初期前提の措きかたいかんで実はいかようにも操作し得る。この種の人間の本性は、なるほどその巧みな筆致によって説得力はもち得るにせよ、それは所詮恣意的な想定の域をでるものではない。その本性を認識する人間主体自身

7) R.Pascal, "Property and Society", *The Modern Quarterly*, 1938, p. 169, 「財産と社会」, 水田洋訳, 『世界の大思想 スミス』(下), 河出書房新社, 1974年, 425-426頁, 参照のこと。

は、すでにその本性を対象化し、その外部に超出来ているではないかといった理屈をもちだすまでもなく、こうした本性論はなによりも組替え可能な人間の複合的な諸属性が織りなす萬華鏡を覗くに等しい。その鮮やかな图像がどれほど強烈な印象を与えようとも、それが本質であることを論定することは難しいのである。

「人間的なものはけっして個々の個人に内在する抽象物ではない。人間的なものとは、その現実性においては、社会的諸関係の総和である」という有名なテーゼは、フォイエルバッハを透過してその背景に「歴史的過程を捨象し」「抽象的な一孤立せる一人間個体を前提せざるをえない」前世紀的な理論構成全般に対するマルクスらの基本的な批判を秘めていたといってよい。⁸⁾ それ自身多様なあり方を許す人間の本性が、そのうちのなにを正面に据えて構造化されることになるかは、けっきょく過去を否定し乗り越える過程で現在が生みだされ、それがまた次の運動の起点を用意するという生成原理に支えられて、かかる歴史的な被規定性の文脈のなかで繰返し変容するというところにこそ、強いていえば人間の唯一普遍の本性が潜むのだという基本認識がそこには込められているのである。

マルクスの唯物史観の提示はなによりも、当時なお支配的であったこうした社会主義の支配的な潮流に対する批判という脈絡において、その意義を確認されるべきものなのである。このような当時の論争状況を意識した展開の濃淡を無視して、徒にそれを一般的な法則に押し上げることに対しては充分慎重であらねばなるまい。「科学的」であることを標榜する唯物史観が果す一種の相対化作用のうちは、抽象的な人間本性論の想定に立脚した論理的な説得という啓蒙主義的な方法を突破し、新たな運動の次元を切り拓こうとする狙いが藏されている点が看過されるべきではないのである。

このように、『諸国民の富』の冒頭には、17,

8) K. Marx, [These über Feuerbach], in *Marx-Engels Werke*, Bd. 3, 1958, S. 5-7, 『マルクス・エンゲルス全集』第3巻、大月書店、1963年、3-4頁。

18世紀における啓蒙主義的な痕跡をとどめる一種の仮構的な市場発生論が冠されていたことはたしかである。そして、マルクスの鋭利なスミス批判が集中しているのも主としてこの側面に對してであり、それはまたこの時代の社会主义運動の基調が多かれ少なかれこのようない規範的な市場理論に依拠していたことを反映するものだったのではないかと推察される。しかしながら、スミスの市場把握のうちには、このように割り切ってすますことのできぬ複雑な面が潜んでいる。そして、われわれが今日その先駆性を見いだし得るもの、『諸国民の富』の第1篇におけるこのようない規範色の強い市場理論ではなく、むしろその後半部分に隠伏するより多元的で歴史的な市場理論なのである。そこには、はじめに述べたような市場と社会的再生産との機動構造をめぐる現代的な関心に対して、啓發的な視角も隠されているのである。次に、この側面に検討を進めることにしたい。

2 スミスの歴史的発展段階論の方法

さて第1篇におけるスミスの議論に卒然としたがうと、スミスの考えていた歴史は人間の本性たる交換を求める性格が充分に開花していない「初期未開の社会」から、商業社会としての文明社会へと自然に漸進するのだという歴史觀がその基本であるかのごとき錯覚に陥る。しかしスミスの歴史理論のうちには、「万人の万人に対する戦い」といった仮構的な「自然状態」から出発し、それを反転させてその止揚機関たるコモンウェルスの不可避性を説くのとある意味で同工異曲の論理構成を超える、実証的な歴史理解が随所にみられる。⁹⁾

たとえば、『諸国民の富』の第5篇において、スミスは、軍事費、司法費、公共事業と公共施設の費用など、主権者ないしは国家の経費は、

9) このようなスミスの歴史理論の実証性を高く評価する論稿として、次のものをみられたい。A.S. Skinner, *A System of Social Science, Papers Relating to Adam Smith*, 1979, chap. 4, 『アダム・スミスの社会科学体系』、田中敏弘ほか訳、未来社、1981年、第4章。

社会構造の高度化にともなってその性格が変化していくという考え方を示し、ここでは「北アメリカの原住諸種族のうちにみられるような、最低で最未開の社会状態」(WN, p. 653, III, 3頁)におかれている狩猟民族、「ちょうどタタール人やアラビア人のあいだにみられるような一段進歩した」(WN, p. 653, III, 4頁)遊牧民族、「ほとんど外国商業はもたず、たいていどこの個人の家でも自家用にそなえておくような粗末な家庭内の製造業以外には製造業をもたない」(WN, p. 655, III, 6頁)農耕民族、そして「住民の大きな部分が、職人と製造業者であるような国」(WN, p. 657, III, 8-9頁)という社会発展の諸段階を区別している。スミスは商業民族段階というのをここで直接取上げてはおらず、その点で最後の農耕民族段階と商業社会との関係は、のちに第3篇に即してみるとかなり複雑な関係にあるものとして捉えられている。だがともかく、このような歴史的な段階規定のうちには、初期未開の狩猟民族における原始的な交換関係のうちに商業社会の萌芽を読み取ろうとするような、歴史に仮託した論理展開は完全に蔭を潜めている。このことは、次の2点を想起してみればさらに明白となろう。

第1に、この発展段階の規定は、商業の発展の歴史ではないという点である。この第5篇で示された発展段階論において、その歴史的な展開動力をなしているのは、むしろ第1章において考察されている軍事の問題であるといつてもよい。スミスの基本的な区分は、第2段階と第3段階にあり、第4段階はここではむしろ第3段階のなかの下位区分として扱われている觀がある。そして、基本的な区分を関係づけるものこそ、どうやってそれぞれの社会体制が自己を保全するのかという侵略と防衛の問題なのである。いづれにせよスミスの場合、農業と製造業との関係を結ぶ商業だけではなく、ここにいう軍事もまた歴史的な発展を規定する別個の原動力として提示されているのである。

しかも注目すべきは、この軍事の問題がきわめて唯物論的な観点から説明されている点であ

る。スミスは、両者の力関係を規定する戦争技術を「あらゆる技術のうちでもっとも高級なもの」(WN, p. 658, III, 12頁)として捉え、この戦争技術の発達を、製造業の独立化を含む分業の深化とそれに基づく生産力の上昇に結びつけて考察しているのである。とはいって、マルクスとの違いは歴然としている。マルクスの唯物史観が主としていわゆる生産力と生産関係との矛盾というかたちで、生産力を起動力としながら体制内部の階級対立の激化を通じて次の段階への移行が引き起こさるとしていたのとは異なり、スミスの場合にはいわば生産力の発展も体制間にはたらく力のバランスを崩し、それが転化の基本的原因になると見なされているわけである。そして、このように生産力の上昇にともなう体制間の軋轢に焦点を合わせたことはまた、単純な定向進化に還元することのできない現実の歴史の錯綜した推移を、あらためて唯物論的な視角で解釈してゆく鍵を用意することにもなっているようと思われるのである。

第2に留意すべきは、ここでのスミスの歴史理論が、農耕民族を遊牧民族が滅ぼすという発展の逆転を含むきわめて動態的な内容に発展しているという点である。先の諸民族の4ないし3段階の発展の背後にひろい意味での生産力の発展を想定していたと見なすことはできるが、しかしそミスは生産力の増進をともなうある民族の繁栄は多分に軍事的な脆弱化という危機と隣り合せにあるという認識に立っていた。¹⁰⁾ すなわち、一方で農耕による定住は全人民が戦場を移動することを妨げ、さらに製造業の発達は農閑期のように長期にわたって職場を離れることを許さなくなる。こうして「人民の総数にたいする戦に出られる人の数の割合は、未開社会におけるよりも、文明社会におけるほうが、必然的にずっと小さい」(WN, p. 657, III, 10頁)ことになる。さらに「牧羊者においては閑暇が

10) 文明化が軍事的精神を衰弱させるという認識自体は、この時代、かなり広範にみられたようである。たとえば、この面でのスミスとルソーとのつながりは、水田洋『アダム・スミス研究』、未来社、1968年、250頁で指摘されている。

あり、農夫にも、農耕の未開な状態では、かなり閑暇があるが、職人や製造業者には、それが全然ない」(WN, p. 659, III, 13頁) という関係は、軍事教練の不足と非好戦的な態度を生みだすことになるというのである。しかも、他方において「農業と製造業の改良にいつもともなう、またじっさい、そうした改良の蓄積された成果に他ならないあの富というものが、隣国すべての侵略を挑発する」(WN, p. 659, III, 13頁) という事態が、これに随伴するという。軍事力の低下と富による挑発との複合作用のために、文明化は破滅への道でもあったことを、スミスはローマ帝国の崩壊を強く念頭におきつつ語るのである。

しかしそうによればこうした歴史の構造は、「あらゆる技術のなかでもっとも高級なもの」に属する戦争の技術が、火器の発明に規定されて大転換を遂げることにより逆転する。これによって、戦闘そのもののいわば機械制大工業化がはじまるのであり、個別兵士の技量の差よりは、組織的な訓練と武器の優劣が勝敗を決するようになる。そして、生産力の増大が常備軍の維持に物質的な基礎を与えるということがこれに重なって、次のような事態が発生することになる。

近代の戦争では、火器に要する経費が大であるから、この経費をもっともよくまかなえる国民が明らかに優位に立つ。また、したがって、富裕な文明国民は、貧乏な野蛮国民よりも明らかに優位に立つ。古代には、富裕な文明国民は、貧乏な野蛮国民にたいして、みずからを防衛することの難しさを思い知った。近代では、貧乏な野蛮国民が、富裕な文明国民にたいして、みずからを防衛することのむずかしさを思い知るのである。火器の発明は、一見はなはだ有害のように見える発明だが、これは文明の永続と拡大の両方にとてたしかに好ましい。(WN, p. 669, III, 31頁)

われわれは、いわば火器の抑止力を示唆するような、ここに示されたスミスの戦争に対する見解自体を評価するものではない。スミス自身も指摘している「常備軍は自由にとって危険で

ある」(WN, p. 667, III, 28頁) という共和主義者の直感は、その後の資本主義体制の内部における階級対立の激化のなかでしばしば軍国主義への傾斜として現実化し、予想以上に抑圧的に作用した点を強調することもできよう。それのみならず、この火器を備えた常備軍こそ、文明化の名のもとに植民地支配を拡大していった点を看過することはできない。ただわれわれの興味は、このように現代の観点からスミスの主張内容を評価することではなく、そこに示された歴史に対するスミスの合理的な方法的視角を捉え返すことにある。

以上の二つの点に留意してみるだけでも、当時の啓蒙主義的な社会主義がその理論的基礎を求めていることを察知し、マルクスがその理論的な批判の必要を強く感じたような、仮構的な歴史に依拠した進歩史観を、スミス自身その一面において、すでに脱皮しつつあったことがわかる。ここでは歴史的な発展段階も、人間の本性の開花として規範化されるような市場一般の作用によるものとは見なされてはいない。

すでにみたように、マルクスのスミス批判が、主として市場と社会的再生産との切断を強調するかたちで、『諸国民の富』の第1・2篇に集中していたことも、当時の社会主义の潮流のあり方をぬきには考えられないものであった。そして、マルクスがこうした否定の理論のうえに立ち、積極的な主張として提示したものこそ、いわゆる唯物史観だったのであり、それはスミスがなお完全には抜けだせずにいた仮構を自ら蟬脱せんとする試みだったのである。

3 「富裕になる自然の進路」

スミスの歴史理論は本稿1でみたように、たしかにその一面に人間の本性の開花の過程として、初期未開の社会と文明社会を市場の漸次的な拡大という経路の両端に配置する啓蒙的な構成を残していた。しかし実際の歴史過程に関するスミスの洞察は、17, 18世紀的な啓蒙思想の仮構論理をはるかに超えて、実証的な眼で現実

の歴史過程のうちに唯物論的で合理的な解釈を施してゆこうとする視座をも宿していたことは、前節で指摘したとおりである。このような点をふまえてあらためて振返ってみると、5篇構成の『諸国民の富』のちょうど中央に位置する第3篇「国によって富裕になる進路が異なる点」は、この両者が反響し合いきわめて興味深い展開となっていることがわかる。「およそ文明社会における大規模な商業といえば、それは都市の住民と農村の住民とのあいだで行われる取引である」(WN, p. 356, II, 3頁)という書きだしではじまるこの篇では、前節でみた発展段階論が主として遊牧民族と農耕民族との軍事的な対抗を軸に展開され、市場の作用に関する考察を欠くものであったのに対して、こんどは農村と都市の関係に焦点があてられ市場を中心に社会的発展を考察するかたちになっている。しかし、この市場への関心は同時にまた、第1篇におけるような伝統的な啓蒙的歴史観を甦生させる契機ともなっており、そのことがこの篇の展開の搖れを大きくしているように思われる。

この第3篇は大きくいえば、都市で営まれる商業が農村で営まれる事業に比べて利益が多いという歪んだ事態が生じたのは、「いったいヨーロッパの政策におけるどのような事情によるのであろうか」(WN, p. 355, I, 586頁)という疑問に対して、それは重商主義という不自然な政策の帰結なのだと答えることを基本的な狙いとしているといえよう。しかしこの篇の内容は、そうしたスミス自身の課した枠組みに完全には収まりきらぬ独自の展開を内包している。この第3篇の第1章「富裕になる自然の進路について」は、たしかに第1・2篇の基調であった人間の本性を出発点とする演繹的な考察を引継ぐかたちで開始されているといつてよい。すなわち、まず都市と農村との間の交換が、都市にとってばかりではなく農村にとっても利益をもたらすものであるということが説かれ、ついでこのように周囲に対しても利益をもたらし得るような大規模な商業を惹起する都市の発達は、しかし農村の発達の後に従うというのが一般的な

原則であろうという結論が下される。農村が都市に先行するという「一般に必要にもとづいた事物のこの順序が、どこの国でもそのとおりになるというわけではないが、人間の自然の傾向によって促進されることは、どこでも変りはない。もし、人為的諸制度がこの傾向を妨害しなかったら、都市は、少なくともその全国土が完全に耕作され改良がゆきわたるまでは、どこにおいても、国土の改良と耕作が許容する以上には発達できないにちがいない」(WN, p.357, II, 6頁)というのである。そしてこの自然の進路はまた、第2篇第5章「資本のさまざまな用途について」における、農業、製造業、そして最後に外国貿易というのが資本投下の自然的な順序であるという考察を承けるかたちで、資本の使途のあるべき序列に照応するものとされているのである。

こうした展開は、その「自然の進路 natural progress」という規定や、「人間の自然の傾向 natural inclinations of man」という表現にも窺い得るように、それがまた人間本来の性向の発露であるというよりも解釈できる規範的側面をともなっている。事実、このような論理の運び方は、まず分業の効用を説き、次にそれが人間の本性に起因する自然的なものであることを明らかにするという、第1篇冒頭において示された説得方法と同型のものと見なすこともできなくはない。しかし、ここでの展開は多少注意してみると、市場の発生に関して次のような新たな展開を含んでいることに気づく。すなわち、第1篇では生産力の増進は分業と交換の拡大によるという規定関係が基本をなしていたのに対して、第3篇ではこの規定関係が逆になっているように思われるのである。ここでスミスが強調するのは、農村内部における余剰生産物の形成であり(WN, p. 356, II, 4頁)，これが契機になって都市との間に一種の大がかりな分業が発達するという説明になっている。スミスは農村における余剰生産物の形成を可能にする生産力の増進の原因を、主として「農村の耕作と新農法による改良」という点に求め(WN, p.357,

II, 5頁), 分業の論理を表面に押出すことはしていない。こうした論理は、本稿1でみたように、マルクスが市場と社会的再生産との間に楔を打込み、市場を社会的再生産がもたらす余剰処理の場として付隨的に派生するものとして位置づけた立場と、このかぎりでは一脈相通じる面をもっているということもできよう。

このように、人間の本性たる交換とそれに基づく分業とが生産性を高めるという論理が逆になり、生産性の増進が余剰物の交換の場としての市場を派生させることになるのだというようにも受取れる理論的旋回は、さらに次のように第3篇の第1章の末尾における問題提起につながってゆく。

もっとも、この事物自然の順序は、領土を有する社会であればどこでも、ある程度は起ったにちがいないのだが、ヨーロッパのすべての近代国家においては、この自然な順序が多くの点でまったく逆転されてきている。都市のあるものでは、その外国貿易が、高級製造業つまり遠隔地向けの販売に適した製造業を導入し、そして製造業と外国貿易とがあいたずさえて、農業の主要な改良を生ぜしめたのである。これらの国のもそも最初の統治の性質に由来し、かつその統治が根本的に変化をとげてしまった後にまでも残った生活の仕方や慣習が、必然的にこれらの諸国に、この不自然で逆行的な順序を余儀なくさせたのである。(WN, p. 360, II, 10頁)

ここでは一方において、いやしくも農業をおこなうための領土をもっていれば、農村での生産力の上昇が都市における製造業の独自の発達を保証し、やがてこの製造業の洗練が外国への輸出とそれに基づく輸入の拡大につながってゆくという発展経路こそ「事物自然の順序」となるはずだという観点が宣言されている。しかしあスミスの歴史に対する実証的な態度は啓蒙的な推論の枠を自ら突破し、こうした歴史的事実に対する唯物論的な解釈へとその関心を誘ってゆく結果になっている。すでにアスミスは「あらゆる社会で、いつの時代にも、原生産物および製造品双方の余剰部分、つまり国内で需要のない部分は、

国内で需要のある物資と交換するために、国外に送られなければならない。けれども、この剩余生産物を国外に運ぶ資本が外国資本であるか自國の資本であるかはさて重要ではない」(WN, p. 358-359, II, 9頁)と述べ、運輸に結びついた外国貿易の超歴史的な存在を示唆していた。このかぎりにおいて、アスミスは資本の外来的性格を容認していたということもできるのである。そして、アスミスの熟知しているヨーロッパに関するかぎり、このような資本の存在が社会的再生産に浸透してゆくという過程こそが基本的な発展の順序であったことを隠そうとはしていない。むしろアスミスは、こうした事実はなぜ起ったかを合理的な筋道を立てて理論的に説明しようとするのである。

続く二つの章、第2章「ローマ帝国没落後のヨーロッパの旧状においては農業が阻害された」、および第3章「ローマ帝国没落後における都市の発生とその発達」では、その間に大規模な市場が創出されることになる農村と都市とが辿った経緯が、それぞれ別の章に分けられ独立に考察されてゆくことになる。すなわち、まず第2章で、前節でみたような遊牧民族による軍事的な侵攻によってローマ帝国が没落した後、長子相続制や限嗣相続制に護られて大土地所有制が長期にわたり維持されたことが、農業における停滞を招いた主たる原因として指摘される。ついで第3章では、農村を支配する大領主と国王との対立という基本的な構図のなかで、「市民は国王の敵の敵であり、国王ができるかぎり市民たちをこの敵から安全かつ自主独立の存在たらしめることが、国王自身の利益であった」(WN, p. 377, II, 39頁)という特殊な状況が生れ、こうして都市は「その近隣農村のみならず、この都市と交易したすべての相手が貧困と不幸に陥っているなかにあっても、ひとり巨富と繁栄を築き上げることが可能であった」(WN, p. 379, II, 43頁)ことが述べられる。

たしかにこの後アスミスは、遠隔地へ販売するのに適した製造業が勃興する経路は、このような外国貿易の末裔といった性格のものだけでは

なく、農業の末裔としての性格をもつものもあり得ることを付言することを忘れてはいいな^{い。¹¹⁾}

しかし、「ヨーロッパ近代史においては、こうした製造業の発達と改良は、外国貿易の末裔たる製造業よりも一般に遅れていた」と述べ、農業の末裔と見なされる製造業の繁栄も、「外国貿易およびこれによって直接に導入された諸製造業の最後にして最大の成果たる、農業の発達と改良の結果としてのみ可能となったものである」(WN, p. 383, II, 49-50頁) という基本線をけっして崩そうとはしていない。スミスはこうして、ヨーロッパの現実を直視することで、そこでは外来的な商品経済が動輪となって社会全体を振り動かしていったことを明確にしているのである。この点でスミスは、人間の本性という観念に立脚した旧い型の啓蒙主義の仮構性を自ら離脱し、実証的な歴史主義の方向へと大きく一步踏みだしているということができるようと思われる所以である。

第3篇の末尾におかれた第4章「都市の商業はいかにして農村の改良に貢献したか」は、「自然の進路」と唯物論的歴史理論とにそれぞれ片足をおいたスミスの理論の揺れ幅を端的なかたちで示す結果になっている。すなわちこの章の前半ではまず、商工都市の発達とその富とが、その近隣の農村の改良と耕作とに貢献した点が分析されてゆく。しかし、この分析の成果はこの章の後半では再度覆され、こうした迂路を経たことがヨーロッパにおける発展の足枷となつたのだという結論を導こうとするのである。このうち前半の論理は、次のように整理できよう。スミスは、まず都市の商工業が農村に及ぼす直接的影響を、大市場の提供、商人による農業への利潤目当ての進出、さらには領主への隸属がもたらす自由な企業心の封殺の打破といった三つの側面から論じる (WN, pp. 384-

385, II, 51-53頁)。そしてさらに、外来的な商品経済は領主自身の私的な物欲の芽を助長し、「およそあらゆる虚栄のなかでも、もっとも子供じみた、もっとも賤しい、そしてもっとも欲に目のくらんだ虚栄を満たすことと引換に、大地主たちは、次第に自分の勢力と権威のすべてを手放してしまった」(WN, p. 389, III, 60頁) というような間接的な効果についても論及するのである。こうして、スミスはこの章の基本的な結論を次のように取りまとめている。

社会の幸福にとって至上の重要性をもつ一変革が、このようにして、社会に貢献するつもりなど少しもない二種類の人々によってひき起されたことになる。大地主の唯一の動機は、まったく子供じみた虚栄を満足させることであった。また商人や職人たちは、たわいのなさという点では少しましだったが、もっぱら自分たちの利益だけを念頭において、1ペニーでも儲けられるところでは儲けようという、かれら独自の小商人根性を貫いて行動しただけのことである。だが、両者いずれも、前者の愚かさと後者の勤勉とが徐々にもたらしつつあったあの大変革について、なんら知りもしなければ、それを予見もしていなかったのである。

かくして、ヨーロッパの大部分を通じ、都市の商工業は、農村の改良と耕作の結果としてではなく、その原因であり誘因であったのである。(WN, p. 391-392, II, 64-65頁)

ここでもスミス一流の意図せざる結果の論理が焼増しされるのであるが、留意すべきは、——スミス自身の意図せざるところであろうが——この場合には「意図せざる結果」と「自然の順路」とがみごとに齟齬する結果に終つてゐる点である。通常スミスは両者を巧みに合致させることにより、結果としての自然的調和という結論を引きだすことに成功するのであるが、この第4章では両者は切断されて「神の見えざる手」という場合の調和のうちに黙示るべき神のすがたは消え去り、完全に自立した「見えざる手」が独りひたすら歴史の更新運動を操り続けることになっている。このような「自然の進路」という観点による意味づけと、「意図せ

¹¹⁾ この「農業の末裔」にいわゆる局地的市場圏を投影し、「外国貿易の末裔」との葛藤のなかからやがて「自然のコース」のまえに「転倒したコース」が滅ぶ結果、本格的な近代化の途が拓かれたのだという解釈もおこなわれている。大河内勝男「一八世紀スコットランドと『富裕の自然のコース』」、大河内一男編『国富論研究』II、筑摩書房、1972年、所収、等参照のこと。

ざる結果」という説明原理の乖離に犀利なスミスが気づかぬはずはない。こうして、第4章の後半でスミスはもう一度これまでの展開の振り戻しをはかることになる。すなわちいまの引用箇所には、次のような逆接が続くのである。

けれどもこの順序は事物の自然の成り行きに反しているので、必然的にその歩みは遅くかつ不確実である。富が工商業に依存することのはなはだ大なるヨーロッパ諸国の遅々たる進歩を、富がまったく農業のうえに築かれているわが北アメリカ植民地の急速な発達と、比較してみるとよい。(WN, p. 392, II, 65頁)

スミスがヨーロッパの停滞を示すためにあげているのは、もっぱらこうしたヨーロッパの植民地との比較である。しかし、ちょっと考えればこのような比較がいかに説得力を欠くものであるかは明白になろう。これらの植民地がその起源において、けっして自然の進路にしたがって発生したものではなく、ヨーロッパの発展を基礎にきわめて人為的な経緯で持込まれたものであることは論をまたない。「北アメリカで、インディアンのしかけてくる戦争ほどたわいのないものはない」、しかしこの「アメリカの狩猟民族たちが、もし万一遊牧民になることでもあったら、かれらに隣り合せていることは、ヨーロッパの諸植民地にとって、いまよりもずっと危険なことになるだろう」(WN, p. 655, III, 5-7頁)という鋭い拮抗のうちに、「土地は、北アメリカではほとんど無償か、あるいはその土地の自然の生産物の価値よりもずっと低い価格で、取得できるはずである」(WN, p. 393, II, 67頁)という農業的発展の基盤もはじめて確保される関係にあったのである。しかも、「わが北アメリカならびに西インドの植民地の発展は、もしもかれら自身の資本以外に他の資本がかれらの余剰生産物の輸出に用いられていないならば、はるかに遅々たるものだったに違いない」(WN, p. 360, II, 10頁)とスミス自らが認めているように、結局はヨーロッパにおける発展に多分に牽引されていたのであり、そのかぎりでは「不自然で逆行的な順序」に大きく依拠し、

その流れに乗って派生したものであったという事実はいかんとも掩い難いのである。

こうして、われわれの観点からすると、第4章の後半でスミスの試みた振り戻しの論理は奏功しているようには思われない。その意味では、この第3篇を通じて浮び上がってくるのは、歴史に仮託した市場の理念化を事実上止揚するスミスの慧眼であり、それを支えている現実の歴史に対して合理的な解釈に徹しようとする実証的な姿勢なのである。スミスは、第1章において「自然の進路」を提示しながら、現実のヨーロッパの資本主義化の経路をただちにそれによって合理化しようとはしなかった。むしろ、農村の停滞に比して顕著な都市の繁栄が契機となり、生産過程における生産力の上昇が市場における余剰物の交換の基礎を与えるという通常の歯車の回転が、市場の刺激で余剰の生産が促進されるという方向に逆廻りしはじめ、こうして市場が社会的再生産の本体を取込んでゆくななくして資本主義経済の挽臼もはじめて駆動し得たことを事実上明確にしているといってよい。かくて余剰が市場を生みだすのではなく、市場が余剰を生みだすという状況が創出されたといふ、いわば前半体系の旧来の啓蒙主義を覆す方法論的挺子を自ら挿し込むがごときには認識が事実上示されているように思われるるのである。

4 スミスの唯物史観

以上のようにみてくると、『諸国民の富』の深層に横たわるスミスの歴史理論にはマルクスの主張した唯物史観と共に鳴る側面が宿されている。だがスミスのこうした側面に対するマルクスの積極的な論評は、残念ながら『資本論』体系のうちに直接見いだすことはできない。そこで最後にわれわれの立場から、スミスがその旧来の自然法思想的な啓蒙の枠組みを背負いながらも新たに開示しつつあった歴史理論の意義を、マルクスの歴史理論との関連において総括してみることにしよう。¹²⁾

12) 同様の関心のもとに、スミスの歴史理論の背景にあ

まず、スミスの歴史理論の特徴をもう一度ごく簡単に取りまとめておこう。第1に強調しておきたいのは、スミスの歴史理論が予想外に実証的な性格を強くもっているという点である。もとよりスミスのうち史実をそれ自体として突き止めようという今日の歴史学的な実証主義はないが、ここで実証的といっているのはこのような研究方法のことではない。われわれが重視しているのは、啓蒙主義がなお宿していた特殊な進歩史観に対して、それを消極化するものとして、その枠には簡単には収まらない事実を事実として持込み、特定の先入観を絶えず相対化し中和することを敢えて厭わない態度のことをいっているのである。このことは、遊牧民族による軍事的逆転や自然の進路に反した富裕化の可能性に関するスミスの認識を想起すれば了解されよう。¹³⁾

スミスの歴史理論の第2の特徴は、その複合的な説明原理の採用にある。すなわちスミスは、歴史的発展段階の推移を生産諸力と生産関係との間の矛盾というようななかたちで、ある単一の基本原理に還元して説明しようとする方向に進むのではなく、むしろそれぞれの局面ごとに社会構造の大きな変革をもたらした固有の因子を洗いだすことのほうに意を用いている。本稿ではふれられなかったが、狩猟民族から遊牧民族への移行に関しては、第5篇第1章第2節「司法費について」等を中心に、財産の不平等という因子によって政府 civil government の必要

るスコットランド歴史学派について考察を進めた研究として、本稿の出発点ともなった次の論稿を参照されたい。R.Meek, "Scottish Contribution to Marxist Sociology", 1954, in *Economics and Ideology and Other Essays*, 1967, 『経済学とイデオロギー』, 時永訳、法政大学出版局、1969年。また、A.S. Skinner, "A Scottish Contribution to Marxist Sociology?", in I. Bradley and M. Howard, eds., *Classical and Marxian Political Economy*, 1982 も併せてみられたい。

13) スミスのこのような歴史的接近方法は、その後の古典派経済学の発展のなかで、演繹的方法が前面に押出されるとともに、みるみる後退していった。この点に関して、その後逆に古典派経済学の完全な衰滅のなかで、スミスの歴史的アプローチを再評価し、リカードミルと区別しようとする動きが生じたという興味深い事実が指摘されている。桜井毅『イギリス古典派経済学の方法と課題』、ミネルヴァ書房、1988年、30頁参照のこと。

性が増大するのだと説き、国家論的な枠組みに焦点を当てた考察を別個に試みている。これに對して、遊牧民族と農耕民族との間の関係については、本稿2でみたようにもっぱら軍事力の格差に注目し、体制論的な視角を前面に打ちだすかたちで考察がなされてゆく。さらに、農耕民族と商業民族との関係を考察する際には、前節でみたように外来的な市場が農村に与える影響を取上げ、どちらかといえば社会体制により内的な葛藤を軸にその複雑な変容過程を分析してゆこうとするのである。その意味では、スミスには歴史を動かすある究極の原理を追求しようとする指向は弱いといってよいであろう。

第3に指摘しておきたいのは、スミスの歴史動学的な関心のあり方である。たしかにスミスも、おそらく生産力の歴史的な発展を反映すると思われる狩猟、遊牧、農耕、製造、商業というような段階区分を試みてはいる。しかしどの関心は、単に各発展段階ごとに静態的な産業史の分類学的な記述をおこなうことにあるのではなく、その間で展開される歴史的な社会構成体の変化の力学に注がれている。もとより各発展段階はそれ自身の内部に安定した固有の構造を備えているからこそ、それによって他と區別され、特定の段階規定を与えることを許すのであるが、しかしスミスはこうした内部構造の分析に徹底するよりも、むしろ異なった段階に位置する体制間の作用・反作用に注目し、こうした構成体がどのように新たな構成体へと遷移してゆくのかを解き明そうとしているといってよい。以上のような意味において、われわれはスミス歴史理論の特徴を、実証的な態度を基礎とした複合的な原理による歴史動学と約言し得るのではないかと考えるのである。

そこでスミス歴史理論のもつ今日的意義を、かかる実証性、複合性、動態性という三面に絞って捉え返しておくことにしよう。まず第1に実証的な歴史認識の深化とそれに対する合理的な解釈というスミスの歴史理論が胚胎する基本姿勢は、今日の経済学を考えるうえでもけっしてゆるがせにできない問題を投げかけていると

いえよう。『諸国民の富』の前半体系に表明された人間の本性を理念化し、本来の市場経済であればこうなるはずであるというかたちで演繹的理説を一面的に強調し、このような理論的に導出された市場と現実との乖離をもって市場経済の限界を識別する尺度となさんとしたり、あるいは理念化された完全な市場との乖離を政策的に解消し、るべき市場状態に近似させることをもって社会的厚生の向上をはかり得るとする立場は、さまざまな意匠でスミス以降も繰返し再版されてきた。

このことはマルクス経済学においても、いわゆる唯物史観にいう歴史の発展段階を既定の公式として固定し、これを現実に当てはめようとする研究姿勢に強く反省を迫る面をもっているように思われる。歴史的な発展の大きな節目になればなるほど、スミスがみていたような動的な逆転や飛越を含むかたちで、理論的な予想を超える事態が発生する可能性は高まることになる。こうしたなかでまず必要なことは、狭い既存の演繹の枠に現実を嵌め込むのではなく、何が生じているのかをそれ自体として正確に掌握することであろう。そして肝心なのは、単にその事実を事実として指摘することに安住するのではなく、それに対してたえず合理的な姿勢で解釈を試みることなのである。唯物史観が単なるイデオロギーに還元できるものではなく、そこに科学性が見いだし得るとすれば、それはこののような合理的な解釈を進めようとする基本的な姿勢の存在いかんにかかっているということができるよう。

すでに指摘したように、『諸国民の富』の後半体系に示されるスミスの実証的な姿勢は、前半体系にみられる政治経済学の外皮を纏った旧式の歴史観を自ら清算して、現実の歴史過程を客観的な観点から捉えなおし、そこに合理的な解釈を施すことで、社会発展の動的な仕組みを明らかにしようとする志向を次第に強く帯びてきているように思われる。そうしたなかでとりわけ鮮やかな印象を与えるのは、歴史的発展の異なった段階に位置する諸民族の対立関係をも

含むかたちで、段階間の移行が文字どおり世界史的なダイナミズムのなかで捉えられようとしている点である。それは、すべての民族が多少の遅速の差はある、ひとしなみに一定の発展段階を経由してゆくというのではなく、最後期のマルクスが感知していたように、ある場合には逆転や飛越を含みながら進む支配的な統合様式の交代として把握されているのである。こうした順路を踏み外して進行する歴史の動態を事実として受け入れてゆけるだけの柔軟性を内蔵し得るかどうか、この点が今日あらためて唯物史観に問われているといえよう。

第2に、スミスの歴史理論のもつ複合的な性格をどう評価すべきかという問題に進むことにする。たしかに、スミスの場合、すでにみてきたように生産諸力と生産関係の衝突、あるいは土台と上部構造に対する規制関係というような、どの発展段階にも共通する説明原理を提示しているわけではない。この点でそれは、マルクスの唯物史観と比べて少なくとも形式的には、理論として的一般性、普遍性を欠いているように見える。だが翻ってみると、この種の歴史動学の最大の特徴は、なによりもまず対象のうちに對峙する二極構造を切出し、その間の関係を追求することを通じて変化の動因を探り当てるという基本的な手法にあるといえよう。この両構造に共通のラベルを貼ることはそれ自体重要なことではあるが、それは同時にこの構造の内部分析の深化を反映するものでなければ意味がない。その点でマルクスが用いた生産諸力と生産関係という識別表徴も、各々の内部の構造分析を深化することではじめて理論装置としての実を示し得るのである。

このように考えてくると、スミスの歴史理論の基本的な方法は、対立するそれぞれの構造に予め共通のラベルを貼付することからはじめるのではなく、むしろ各々の移行局面ごとに固有な対立構造を、いわば下位レベルにおいて一般化しようとするものであったことに気づく。ここにはおそらく、スミスが移行の動因に着目したがために、その結果として各段階に共通にみ

られる普遍的な対立構造の抽出よりも、個々の段階間に潜む固有の動因の識別に努めるようになったという事情があるものと思われる。その際たしかに、スミス自身は、発展段階の移行ごとに異なる対立関係を指摘するにとどまるのであるが、それは可能であればさらに一般化することを妨げるものではない。生産力の発展が、この下位レベルの構造にいかなるすがたで発現するかを、たとえばそれが体制間の軍事関係にどう反映されるのかとか、あるいは市場と社会的再生産との結びつき方をどのように変化させるかといったかたちで、分析してゆくことは当然可能のことなのである。

このようにスミスがそれぞれの発展段階に対応する下位レベルを設定して、そこで歴史的な変化を惹起する対立構造の一般化をひとまずはかるという方法を示唆したことは、唯物史観と経済学との関係を整理するうえでおおいに参考となる。すなわち、このような立場は、マルクス経済学の内部において、唯物史観をいきなり生産諸力と生産関係という対立構造で捉えて、これに接近しようとしてきたことに対して反省を求め、むしろ資本主義的段階という特殊な対象を設定し、そこで市場と社会的再生産という下位の対立構造を媒介項に据えるという方法があり得ることを意味する。経済学はなによりもまず、市場をめぐる下位の対立構造の理論化に有効なのであり、こうした資本主義的段階をめぐる移行への一次的な接近をふまえて、唯物史観という歴史理論一般への拡張は二次的に展望されるべきなのではないかと考えられるのである。¹⁴⁾

14) 内容の曖昧な唯物史観の公式を経済学に適用する教条を排し、逆に経済学の研究を通じて唯物史観なるものが意味するところを合理的に解釈すべしと説いたことは、けだし宇野弘蔵の卓見であった。その場合の基本は、資本主義経済を対象とする経済原論を通じて経済過程が純粹に把握できるということが、「土台」を「上部構造」から自立した存在として認識することを可能にするのだという主張にあるといつてよい。しかしそれと同時に、土台が内包する生産諸力と生産関係の矛盾の問題も、恐慌論によって独自に解明されるという見解がしばしば見受けられる。前者の基本的な主張は、このような静態的な構造に唯物史観が終始するものではないにせよ、その主張内容自体はわれわれにも充分納得がゆく。しかし、あ

以上のように捉え返してみると、市場の社会的再生産に対する外來性を明確にするとともに、労働過程を後置することでその超歴史性を理論構成上の位置に反映させた『資本論』の体系は、まさしくこのような市場と社会的再生産との力動的な作用・反作用を理論的に分析してゆくための視角を用意するものであったことが明らかになってこよう。たしかに、市場と社会的再生産といった対立構造をいきなり歴史的な発展段階全般に当てはめようとすれば、それはいわゆる商品経済史観の誇りを免れないであろう。だが逆にこのことは、マルクス経済学の理論的な基礎として、いきなり生産諸力と生産関係の対立構造を見いだそうとしてもまた、その単純な裏返しでしかないことを意味する。スミスの複合的な歴史動学のうちには、生産諸力と生産関係といった一般枠のもとに軍事や市場という枠組みを設ける、より総合的な方法を読み取ることができるよう思われる所以である。

第3に、市場経済を歴史動学的な観点から捉えその変容に着目せんとするスミスの視角は、とりわけ世界史的な発展段階のなかで市場が果す役割をめぐり、今日あらためて重要な意味を帯びつつあるように思われる。文明社会を商業社会として理解する『諸国民の富』の前半が与える印象とは異なり、スミスは世界史全体を通して眺めた場合、そこで市場が果す役割をかなり限定されたものに留めていた。余剰物の交換はおそらく初期未開の段階から存在してきたといってよいであろうが、しかしこの種の交易は社会的構成体をつねに同じように脅かしてきたわけではない。スミスによれば物的再生産の場は、軍事的な侵攻と市場による包摶という二

たかも恐慌論だけが唯物史観に対して論証を与えるかのごとき観のある、動態に関する後者の見解は、唯物史観にいう矛盾を生産諸力と生産関係という一般的な形式を固定し、経済学に直結しようとしたことの弊害を端的に示しているように思われる。ここに媒介項の必要を説かねばならぬ一つの由縁がある。宇野弘蔵『経済学方法論』、東京大学出版会、1962年、108頁、『恐慌論・商業資本論の諸問題』、法政大学出版局、1963年、78頁、『社会科学の根本問題』、青木書店、1966年、198頁、『経済学を語る』、東京大学出版会、1967年、160頁、『マルクス経済学の諸問題』、岩波書店、1969年、120頁、『資本論の経済学』、岩波新書、1969年、92頁など参照のこと。

つの磁界のもとにおかれてきたのであり、¹⁵⁾ 近代初期のヨーロッパで後者が支配的となるに際しては、きわめて特殊な歴史的事情が与っていた点が看過されるべきではない。本稿3においてすでにみたように、火器の発明を契機に遊牧民族に対する相対的な優位を確立した農耕社会が、しかも前段階における支配関係の継続によって生産現場たる農村の発展を自縛し、いわば外部との関係では安定しつつ内部的には停滞するという特殊な状況のもとで、市場の農村への蚕食という過程がはじめて本格化し得たというのが『諸国民の富』の第3篇を中心に示された近代に関するスミスの歴史認識であったように思われる。これを裏からいえば、農業がそれなりに発展している社会では、市場原理が社会的再生産に影響を与えることは難しいのであり、そのことがヨーロッパ以外においては本格的な市場経済の始動を遅らせるという逆説を生んだと解することもできるのである。

このようにして、市場ははじめて余剰が処理される場ではなく、自ら余剰を汲出する装置に転じ得たと考えることができよう。それ故またこうした資本主義的市場は、少なくともその出自において、社会的な再生産過程に対してけっして中立的ではあり得ないことになる。スミスの歴史理論のうちには、社会的な再生産過程が分泌する剩余を処理する場として市場を捉える中立的な市場像を払拭し、超歴史的な市場一般の存在を否定することにより、市場は近代において社会的再生産に浸透する力を備えたものに変容したと説く観点が読み取れる。そこにはむしろ、社会的再生産が市場の浸透圧力に曝され、特殊歴史的な環境のもとで自己の外周を絶えず拡張しながら自らも変容する動的な近代ヨーロッパにおける市場経済像が先取りされている

15) 世界システムの統合方法は、世界帝国と世界経済のほかにないとしたウォーラシュタインの説がたちに想起されよう。I. Wallerstein, *The Modern World System, I*, 1974, 1, 『近代世界システム I』, 川北稔訳、岩波書店、1981年、第1章。

觀さえある。スミスの場合、市場の浸透を受けとめる分業の深化は、同時にまた市場の広さに制約されざるを得ないのであり、市場の拡大に領導されてはじめて全面化されるものとして捉えられている。市場はそもそも生産の場と生産の場との間に棲息するものであり、その起源からして市場に外周などあり得ないといった立場は、少なくとも『諸国民の富』の体系全体を視野の収めるかぎり、スミスの与するものではなかったように思われる。とすればまた、こうした市場経済はいったん成立すれば、その後は与えられた軌道に沿ってある構造の内部を安定的に循環する自己維持的な体系というよりは、一定期間続く安定状態は次の自己改変の過程を準備するというかたちで、いわば間欠的な変容の過程を繰返し経過せざるを得ないものとなろう。

たしかにスミスの場合、市場の浸透に対して反発する抗力が後景に押しやられる傾向があることは否めない。このことが動的な過程を描きながらも、なおそれがたかもある均衡状態に収斂する運動であるかのような印象を与えずにはおかないとあっていいるように思われる。こうしたスミスによる市場経済の認識を背景においてみるととき、マルクスの資本主義像は、『諸国民の富』の前半部分のみを経済学として切出して理念化するときとりわけ顕著となる収斂論的な側面を、労働力の商品化を核とする抵抗体の存在を理論の基底に取込むことによって相対化し、市場と社会的再生産の作用・反作用を真に動的なすがたにおいて捉え得たものとして浮び上がってくる。その意味でマルクスのスミス批判を超える『諸国民の富』の後半体系を軸にする歴史理論のうちには、やがて骨化する古典派体系の枠組みを破碎し、再びマルクス経済学の本来的な展開に連結する隔世遺伝子がすでに伏在しているように思われるのである。

〔東京大学経済学部助教授〕